平成23年度8020公募研究報告書抄録

研究課題：8020達成者と未達成者における口腔機能と認知機能,運動機能,QOLとの関連

研究者名：松田謙一，池邉一典，香川良介

所属：大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座歯科補綴学第二教室

I. はじめに

咀嚼はヒトの日常的な基本行動であり，身体活動，健康維持に必要な栄養素の補給に重要な役割を果たす．歯数の低下に伴う咀嚼機能の低下は，運動機能や認知機能の低下をもたらす可能性があるが，認知障害が顕在化していない高齢者において，客観的に評価した口腔機能と認知機能や運動機能との関係を論じた我が国での報告はみられない．本研究では，自立した生活を送っている8020達成者と未達成者とを比較し，口腔状態の評価を行うとともに，運動機能や口腔認知機能，口腔関連QOLについて調査を行った．

II. 方法

被験者は，兵庫県および東京都における都市部および非都市部の計4か所を選定し，住民基本台帳から無作為に抽出した在宅高齢者のうち，研究の趣旨に同意の得られた79歳から81歳の977名とした．

調査項目は，口腔内検査，口腔機能（最大咬合力，唾液分泌速度，味覚），運動機能（全身の筋力をみる握力，敏捷性をみる座位ステッピングなど5項目），認知機能（口腔立体認知能試験），口腔関連QOLとした．

分析は被験者を8020達成者と未達成者に分類し，口腔機能，運動能力，認知機能の各調査項目について，t-検定を用いて比較検討を行った．有意水準は5%とした．

Ⅲ．結果とまとめ

本研究の結果より，口腔機能は達成者と未達成者を比較したところ，最大咬合力に差を認めた．咬合力を保つためには歯数の減少を防ぐことが重要であると考えられる．

また，唾液分泌速度の結果，未達成者では唾液分泌速度が有意に低下していることが疑われた．つまり，8020を達成することは，咬合力のみならず，唾液分泌速度を保つためにも重要であることが示された．

運動機能においては，本研究の結果からは大きな差は認められなかったが，転倒回数には差を認め，未達成者では達成者に比べ転倒回数が増加するという危険性を示している．

また，立体認知能力においても差を認めたことより，未達成者では口腔内の食物を正しく認識する能力が低下しており，効率的な咀嚼を円滑に行えない可能性があるといえる．

GOHAIスコアに有意な差が認められたことから，やはり達成者の方が口腔関連QOLが高く，口腔に関する満足度が高いことが示された．

Ⅳ．結論

8020達成者と未達成者の間に，口腔機能，転倒回数，口腔認知機能，口腔関連QOLに有意な差が認められ，達成者は未達成者に比べ口腔機能のみならず運動機能，認知機能，口腔関連QOLが良好であることが示された．